

過渡期社会における共産主義理念

——マルクス・コルシユの理念把握の方法をめぐって——

一 理念の実現性

本稿は共産主義理念の現実性 (die Wirklichkeit) を検討し、その側面から過渡期社会の一性格を明らかにすることを意図する。マルクス主義社会理論における過渡期 (die Transformationsperiode) の把握は現代社会主義の歴史的位置づけにかかわって議論されてきているが、本稿では過渡期社会を、共産主義理念の現実化の全過程をふくむいわゆる広義の意味でとらえることとする。したがってここでは過渡期を理念論の側面からとらえることに主題を限定し、他の問題を捨象している。以下の論述ではマルクスにおける共産主義理念の現実性の意味を

問い、ついで、この点でのカール・コルシユの主張を検討し、過渡期社会把握のうえでのその意義を検討する。

マルクスにとって、未来社会のもろもろの理念像は、近代ブルジョア社会の抽象的否定ではなく、その止揚 (内在的克服) をつうじて形成されるべきものであった。マルクスは理念の抽象性と現実の没理念性とをともども否定して、理念と現実との抽象的分離にかえて、両者の現実的關係を見出そうとする。

「理性 (die Vernunft) はいつでも現に在存していた。ただ、いつでも理性的形態で存在しているとはかぎらなかったが。批判家が理論的および実践的意識のどんな形態から出発してもよいし、現存する現実の固有な形態か

中西 新太郎

らその当為および究極目的たる真の現実を展開できるのはそういう理由(理性が現存するという——中西)からだ。」(1)三九五) 現実の世界にたいして批判家のなすべきことは「そもそも世界がなぜたたくのかを世界に示すこと」であり、「意識は、世界がそれを獲得(aneignen)すまいと思つたところで、獲得せずにはいられないもの(die Sache)なのである」(同、右)。ここでいう理性や意識は、現存する現実を展開することによってのみ獲得される、その意味での具体的・現実的理念にほかならない。理念一般が非難されるべきではなく、抽象的形態に貶められた理念が批判されるべきである。ここには理念の現実的あり方にたいするマルクスのはっきりした主張がうかがわれる。

理念のこのあり方は共産主義理念にかんしても例外ではない。「共産主義は無神論とともにただちに(オーエン)はじまるが、その無神論はまだたんにひとつの抽象にすぎぬだけに、最初はまだ、共産主義であることからかけはなれてゐる。無神論の人間愛は、だから最初はただ哲学的な抽象的人間愛にすぎないが、共産主義の人間愛はすぐさま実在的(Real)であり、ただちに活動す

べく緊張している。」(2)五三七)「共産主義は否定の否定としての肯定であり、そうであるから、人間的解放および回復の、すぐつぎの歴史発展にとって必然的で、現実的な契機である。共産主義は最もちかい未来の必然的形態であり、動的な原理(das energische Prinzip)である。しかし共産主義は、そうしたものとして、人間的発展の目標——人間的社会的静態(die Gestalt)ではない。」(2)五四六) 共産主義理念の現実的あり方としてみると、マルクスは初期のこの思想を最後までつらぬいたと考えられる。理念はその現実的基礎から展開されなければならないが、その過程はまた理念の現実化過程でもなければならない。マルクスが提示した共産主義理念——社会的所有の実現、社会的生産の無政府的性格から意識的・計画的性格への転化、国家の死滅、分業の廃棄等々をその構成要素とする⁽³⁾は、マルクスのこの理念把握の立場にてらせば、eine dogmatische Abstraktionであつてはならず、到達すべき状態の指示におけるものでもないであろう。「共産主義とは、われわれにとって回復されるべきなんらかの状態、現実がそれへ向けて形成されるべきなんらかの理想ではない。われわれ

(21) 過渡期社会における共産主義理念

は、現状を止揚する現実の運動を、共産主義と名づけている。この運動の諸条件は、いま現にある前提から生ずる。」〔22〕(七二)ここでマルクスは理念の、運動実践への解消をのべているのではなく、運動に基礎づけられた理念の実践的あり方をのべている。⁽⁴⁾ そうでなければこの運動を共産主義と名づけること自体意味をなさないだろうから。

共産主義諸理念は、「現にある前提」(現実的基礎)をもっている。〔2〕(五三四)。すなわち、『経済学—哲学草稿』の表現によれば、「私的所有の運動」こそが共産主義理念の生いたってくる現世的基礎である。⁽⁵⁾ しかし、共産主義諸理念が、同じように私的所有の現実的基礎から生じるものもろの現実的意識とはことなるのは、それらが、それらの現実的基礎の解明を媒介として、未来の現実ともリアルにかかわる、という点にある。共産主義が動的原理である、とされている理由もそこにある。いいかえれば、共産主義諸理念は過渡期社会の現実から疎外された仕方でのみ形成される理念であってはならず、過渡期の現実内に在化されるものでなければならぬ。したがってまた、これらの理念の存立形態は過渡期社会

の現実を把握することと密接な関係をもたざるをえないし、もつ必要がある、といえる。

二 共産主義理念と生産諸力

『経済学—哲学草稿』でマルクスは、共産主義を「私所有的の積極的止揚」(die positive Anhebung des Privateigentums)とよび、その最後の段階を「人間による、人間のための人間的、本質の現実的獲得」(「完成された自然主義として人間主義に等しく、完成された人間主義として自然主義に等しく、人間と自然との抗争、人間と人間との相剋の眞実の解決、現存と本質との、対象化と自己確証との、自由と必然性との、個と類との抗争の眞の解決」〔2〕(五三六))と特徴づけている。こうした表現から、共産主義理念が、有機的で、ゲマインシャフト的な社会状態を想定したものだ、という帰結をひきだすのは容易だが、問題はそこにあるのではなく、この理念を動的原理に関係づけるような現実的基礎はなにかという点にある。いいかえれば、理念の現実化条件を理念の現実的基礎から明らかにすることが必要なのである。この点に関しマルクスが、産業を人間の本質諸力(die

Wesenskräfte des Menschen) の対象化形態にとらえていたことに注意しよう。(2)五四二以下) 人間の人間のあり方を物質的生産とむすびつける試みだからである。物質的生産はまだ私的所有の運動にとらわれておりしたがって人間の普遍的定在 (das allgemeine Dasein des Menschen) も疎外の内部で運動するほかない。そうであるからこそ、私的所有の現実に否定的にかかわることによってそのうちに肯定的なものを見出す方法が必要とされる。共産主義はこの意味で否定の否定としての肯定であった。

人間の物質諸力の物質的あり方は生産諸力というカテゴリーで代表されるようになる。「工業を、人間がそこで自分自身を、自分自身の諸力と自然諸力とをはじめて獲得し、自己を対象化し、自分が、人間の生活をおくるための諸条件をつくりだしてきた大作業場と考えることができる。」(3)八二) このような、人間諸力の物質的形態としての生産諸力は私的所有の運動をつうじて、自立の形態を与えられる。共産主義は、この自立化された生産諸力のあり方(形態)を変えざる運動にほかならない。「共産主義がこれまでのすべての運動と区別される点

は、それが、これまでのすべての生産および交通諸関係の基礎をくつがえし、はじめて自覚的に、すべての自然的 (naturwüchsig) 諸前提をこれまでの人間がつくりだしたものとみなし、それらの自然的性格 (die Naturwüchsigkeit) をはぎとって、結合した諸個人 (die vereinigten Individuen) の威力に服属させるところにある。だから、共産主義制度は本質的に経済的であり、諸個人の結合諸条件の物質的再建である。共産主義は、現存の諸条件を、こうした結合 (eine Vereinigung) の諸条件にかえる。」(22)一四四)『ドイツ・イデオロギー』のこの記述について、社会の形成の自然的あり方と意識的あり方、結合した諸個人からなる社会における物質的なものとの精神的なものとの関係の問題も検討する必要があるが、ここではさしあたり、共産主義を、市民社会の現存諸条件を未来社会の諸個人の結合諸条件に転換させる過程(運動)とみていること、この転換を可能にする条件(すなわち理念の現実化条件)が現存の諸条件のうちにあるとみていることだけを確認したい。そしてこの共産主義理念の現実化条件が、私的所有のもとで自立化し、「物象的な姿態」(die sachliche Gestalt)をとった生産

諸力の総体であることは『ドイツ・イデオロギー』の主要モチーフとして、個々の引用を行なうまでもなく明らかである⁽¹⁰⁾。生産力はしばしば、特定の社会形態から超越した、歴史発展のその意味で自立的なモメントとみなされるがそれは正しくない。生産諸力が「諸個人の交通と相互連関」によらなければ現実の諸力とはなりえないのはブルジョア社会にかぎられることではない。生産諸力がカテゴライズされる仕方は、特定の社会構成体の形態を規定することと本質的關係をもち、生産諸力の内容規定そのものも歴史的に変化するものである⁽¹¹⁾。そこで、生産諸力を共産主義理念（「共同の生産手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識してひとつの社会的な労働力として支出する自由な人間たちの結合体」⁽⁹⁾九二、というような表現で代表される）の現実条件とみなす場合、その生産諸力の内容が問題となる。

〈大工業的結合関係〉

すでにみたように、共産主義理念の現実的基礎たりうる生産諸力の内容は、なによりもまず、大工業という生産様式にもとめられた。そこでマルクスによって主とし

て表象されたのは、科学の意識的応用による生産過程の科学的編成、共同でしか使用できない労働手段の発達等等をつうじて、個別的生産過程が「直接に社会的な」すなわちゲマインシャフトリッヒな過程になっている事態であった。この現実的基礎から出発して、物質的生産における意識性、計画性を科学的で有機的な生産システムに物質化することができれば、生産システムの計画的編成の社会的拡大を再生産的な生産諸関係の一環にみこむことが可能となる。すなわち「労働する社会が、その社会の前進的な再生産、たえず拡張される再生産の過程にたいして科学的に対応する」⁽⁶⁾（二三二）、状態が生まれるはずである。この点は、エンゲルスの強調もあって、共産主義理念の現実化にとって、最大の、ほとんど唯一のといってもよいほどの基礎とみなされてきた。しかし、そうしたとらえ方には欠陥があるように思われる。すなわち、大工業的結合関係の社会的生産全体への拡大を共産主義理念の現実化の唯一のプロセスと考えることには無理がある。いいかえると、社会的分業の、過渡期社会に固有の自然的性格をもっぱら大工業的結合関係によってのみ克服することは不可能なのである⁽¹²⁾。こ

の構想では生産力は社会的生産の技術的組織方法ととらえられ、それとともに、物質的生産（土台）の内部における意思関係の物質的あり方がせまい範囲に限定される。なぜなら、結合生産者（自由な諸個人）の意識性は主として、個別の生産過程の対象化された形態であらわされ、意思関係はそれに直接に依存するものとして扱われるからである。この把握によると、「生産力」が発展すればするほど（大工業者の結合関係が拡大すればするほど）意思関係が物質的生産にとって外在的なものとなってゆくことになる。この構想によればたしかに、結合生産者の意識性、計画性を、生産過程の合理的テクノロジーとして、「技術的形式」で土台のなかにふくめることが可能であり、それによって過渡期の経済システムから恣意性、主意主義を排除する役割が期待できる。しかし、この構想は同時に、意思関係を土台から排除する方法のために、過渡期社会における意識性のあり方を内在的に批判する方法を欠いているのである⁽¹⁵⁾。

大工業的結合関係は生産諸力の重要な要素であるが、共産主義理念の現実化過程を把握するためには、生産諸力の内容をより広くとらえてゆくことが必要である。

〈結合生産者の意識性〉

「結合生産者の意識性」を、社会的生産システムを自由に、意識的に運営できる能力として、生産諸力の要素にくみいれることが可能である。この要素は、現実には、直接生産者であるプロレタリアートが自己を階級として意識的に普遍化しうる能力と関係している。しかし、もしこの要素を生産者主体の側の意識性として自立化させるならば、（したがってその意味ではやはり、物質的生産の外側にある要素として把握するならば）前節での生産力把握とは逆の、しかしまた相補的な欠陥が生まれる。

共産主義制度が「諸個人の結合諸条件の物質的再建」とされるかぎり、結合生産者の自由や意識性もまたこの物質的部面におけるあり方の問題として考える必要がある。意識のこの現実的、物質的あり方への検討を欠いた意識性の把握では「唯心論と唯物論との対立の解消」としての共産主義への現実的接近たりえないのである⁽¹⁶⁾。

この点と関連して、狭義の過渡期論がしばしば経済過程における意識性の契機を土台にたいする上部構造の規定性というかたちであつたことに注意しておきたい⁽¹⁶⁾。そうした方法によれば、少なくとも、狭義の過渡期

から本来の社会主義段階へいたる過程で意識性のあり方の転換がどのようにして起こるのかを示す義務が生じる。そうでないと、狭義の過渡期に固有の経済構造から生じる、意識性(上部構造)の特殊な経済機能が、社会的生産の組織化における意識性、計画性のあらわれとして「結合生産者の意識性」の唯一のあり方とされる可能性が生まれるからである。

共産主義理念の現実化過程を基礎づけるにあたって、大工業的結合関係や生産システムの意識的運営能力を、それぞれ一元的に理念の現実化条件とすることは無理である。すなわちそれらは、それだけとりあげたのでは「現存の諸条件を結合の諸条件にかえる」形態を示しえない。⁽¹⁷⁾

三 共産主義理念の過渡的現実性

結合生産者の意識性と大工業的結合関係との相互にかわりをもち、それらを現実の諸力とするものこそが、すなわち、共産主義理念の現実化の形態的基礎が見出されなければならない。さしあたり『経済学批判要綱』のつぎの記述を手がかりにこの問題を考えてゆこう。

「人格的依存諸関係 (die persönlichen Abhängigkeitsverhältnisse) (最初はまったく自然生的な) が最初の社会諸形態である。そこでは人間の生産力 (die menschliche Produktivität) はわずかな範囲で、しかも孤立した場所々々で発展しているにすぎない。物象的依存 (die sachliche Abhängigkeit) にもとづく人格の独立性が第二の大きな社会形態である。そこではじめて、一般的な社会的素材転換、普遍的諸関連、全面的欲求、普遍的諸能力のシステムが形成される。自由な個人性 (die freie Individualität) が第三の段階であって、それは諸個人の普遍的発展と、彼らの社会的諸能力である彼らの共同的、社会的生産力 (die gemeinschaftliche gesellschaftliche Produktivität) にもとづくことである。」^(6)七五)

生産諸力は、ここでもはっきりと、人間自身の活動の産物であり、人間の人的なあり方にかかわる諸力であるとされている。第三段階における生産諸力の内実は第二段階(ブルジョア社会)をつうじて形成されるから、第二段階の生産諸力の形態を第三段階にてらしてどう理解するかが問題である。

「物象的依存にもとづく人格の独立性」とはなにか。「全面的私利の孤立化」と自然的な社会的分業との相互補完関係(〔六七六〕)といいかえると、それは商品生産が全面化した(したがって論理的には、労働力の商品化をふくんだ)⁽¹⁸⁾社会形態を指すことがわかる。一般的な社会的素材転換(der gesellschaftliche Stoffwechsel)とは素材的側面からみた交換過程を意味しており、商品交換が社会的生産過程を媒介することによって社会的生産システムが総体として成立することを示している。自分の労働にたいする所有を社会的労働にたいする所有に転化する社会的操作の場(〔九〇三〕)としての交換過程は、直接的生産過程における結合(die Kombination)とはことなる結合の形態をとる。この、交換過程に媒介された諸個人の結合(die Assoziation)の形態が「自由な個人性」の成立する状態にみちびく「動的な原理」を明らかにするべきであろう。この点からみて注目すべきなのは「物象的依存にもとづく人格の独立性」という形態が諸個人の「全面的」欲求や「普遍的」諸能力の発展をもたらす、という関係である。物象化(die Ver-sachlichung)とどう、ブルジョア的生産に特有の転倒

形態のもとで(したがって疎外の内部⁽²⁰⁾)、その形態にそくしてその形態の積極的止揚にむかう運動の論理が内包されてゐる。この、ブルジョア的生産の「形式」の肯定性は、第一に、大工業的結合関係(Kombination)のもっとも発展した形態)とは区別される、社会的生産の媒介機構としての経済諸関係が対象的形態で形成されるという点にもとめられる(生産の二重の社会性)。「諸個人が彼ら自身の社会的関連をつくりださないうちは、彼らはこうした関連を支配下におくことはできない。」(〔六七九〕)すなわち、経済諸関係が、諸個人の意思関係に包摂されるものとして存在するのではなく、ぎやくに、諸個人が関係のない手として、経済諸関係の人格化⁽²¹⁾(die Personifikation)として存在する、ということが諸関係の統制の前提なのである。つまり、政治的、宗教的等々⁽²²⁾のよそおいをはぎとられた純粹な経済関係の存立(ブルジョア的生産はこの形態によって支配—隷属関係を対象化するのだが)が共産主義理念の現実化条件のひとつである。

ブルジョア的生産の「形式」の肯定性は、第二に、右にみた生産の二重の社会性に照応するかたちで、意思関

係、諸個人の意識性が経済過程に内属的に形態化される点にもとめられる。すなわち、物象化の進展は諸個人の意識を経済過程の外部に排除するのではなくて、その進展に相補的な、諸個人の、関係のない手としてのあり方を生み出す⁽²³⁾。諸個人のこのあり方は、経済諸関係の對象化された全システムにたいして、「私的利害」としてあらわれざるをえない。共同利害は諸個人の「自己内反省された個別利害の背後」(〔6〕九一二)に存在するだけであり、その意味で社会的生産の普遍性、共同性は抽象的である。さて、個別と普遍のこの分裂のもとで、利害の共同性が諸個人の側では「必要、欲求、能力等々としてのみ現われる」(〔7〕二八九)。とすれば、「物象的依存にもとづく人格の独立性」の段階における欲求の全面性や能力の普遍性は、個別(私的利害)と普遍(共同利害)との分裂のもとでの全面性や普遍性の特殊な存立形態を示すものである⁽²⁴⁾。すなわち、個人の側から、能力や欲求がそれとして(私的であれ)把握でき、表出できること、それらが社会的素材転換をつうじて、欲求の体系等々のなかで位置づけられることが、ここでの普遍性のあり方である。そして「自由な個人性」の段階

における諸個人の普遍的発展が現実化されるプロセスは、このような普遍性の、現存の存立形態から出発することによって現実に可能となるはずである。プロレタリアートが自己を階級として普遍化する能力も、この形式に媒介されることによって形成され、現実的なものとなってゆく⁽²⁵⁾。意識性のこのあり方は、経済諸関係の對象化された形態にむすびついているがゆえに、前にみた、意識性の観念的あり方からくる欠陥をまぬがれている。

このふたつの条件のもとではじめて、結合生産者が生産諸関係を透明に見とおす可能性が生まれる⁽²⁶⁾。生産の二重の社会性を自由な諸個人たる結合生産者の意識性が経済関係のなかにくみこまれる形態としてとらえるとき、そのブルジョアの統合の形式を共産主義理念の現実化条件としての生産諸力のなかにふくめることができる。もちろん、ブルジョアの生産諸関係の一環としてのこの形式は、搾取関係、支配—隷属関係の外化形態でもあり、この形態をつうじて、「他人の意志の獲得」という支配関係の根本前提(〔6〕四〇〇)が社会的生産の全領域にたづぬかれることはいうまでもない。しかし、ブルジョアの生産諸関係の排除が、諸個人の共同性の直接的な物質化⁽²⁷⁾

や結合生産者の意識性の直接的な規定性を、要するに、人間の類的性格 (das Gattungswesen)、本質諸力、生産諸力等々の普遍性の直接的な存在を意味するのでないならば、過渡期の社会関係の編成にとって、ここでみたような、普遍性の存立形態の現実性が積極的に把握されるのである。過渡期社会のこの、形態からみた把握をつうじて、共産主義理念と、現存の現実的基礎とが媒介可能になるといえよう。もちろん、ここでみた「社会関係の統合形態」は、生産諸力のモメントとして抽象されたのであるから、それ自体を理念の現実化条件の一元的基礎とみなすことは前節でのべたと同様の欠陥をもたらす。大工業的結合関係、生産者の意識性、文化水準もふくめた諸能力、それらを媒介する社会機構等々の生産諸力の運動形態を明らかにするためには、過渡期の生産諸関係の全体として検討が必要であり、ここでは、マルクスの理念把握にそくしてみると共産主義理念の現実化にとって、本質的に必要と思われる点をのべたにすぎない。

四 コルシユの過渡期把握

共産主義理念の現実性についてマルクスと同様の把握から出発して、理念の現実化過程の形態をよりたいて問題としたカール・コルシユの見解をみる。

コルシユの場合にも、理念の現実性、此岸性 (die Diesseitigkeit) の立場が強力に主張される。コルシユによれば、理念と現実との、理論と実践との、自然と社会との、唯物論 (物質) と観念論 (意識) との抽象的分離がブルジョアの二元論の特徴であり、この二元論の克服をめざすのがマルクスの唯物論の本質である。⁽²⁸⁾ こうした二元論的分裂の克服をあつかうのが「唯物論的移行問題」 (ein materialistisches Uebergangproblem) であり、理念と現実との相互関係の解明はその一環をなす。

「实践的、社会的、政治的闘争に勝利をおさめたプロレタリア階級が、うちくだかれたブルジョア国家制度にかえてうちたてるであろう国家制度についてもまったく同様のこと (哲学と科学とのブルジョアの分裂の克服と同様のこと——中西)⁽³⁰⁾ がいえるのであって、この国家制度は、『国家』 (今日の言葉の意味での) という性格を、本質的一面としてつねにもち続けるであろうし、他方同時にやはり、この国家制度は階級なき、したがって国家

(29) 過渡期社会における共産主義理念

のない未来主義社会にむかう移行段階であるという性格にてらして、もはやまったく『国家』ではない、国家よりも高度なものかになっていくという本質的一面をそなえているであろう。」(17)一三)

過渡期社会がなんらかの意味で共産主義理念の現実化の過程であるということは、コルシユにかぎらず、マルクス主義的理念把握の共通の前提である。問題がその現実化の形態把握にあることは前節でみた。コルシユに特徴的なのは、理念の現実化(理念の普遍性への要求)が現実化の形態的一元性に結びつけられていない点である。たとえば、右の引用でみた国家制度のあり方についていえば、それは具体的には「プロレタリア国家に統制された経済的レーテ体制」(das durch der proletarischen Staat kontrollierte wirtschaftliche Rätssystem) (18)一一〇)であって、一方では「観念的総プロレタリア」(Der ideale Gesamtproletariat)としての「国家」が、他方では、労働者の共同性の直接的形態としてのレーテ制度が存立する。両者はそれぞれ相互に解消されえない。しかも両者はつねに調和的に一体化の道程をすすむのではなく、相互の矛盾をはらみうる。コルシユはプロレタリア国家が

いわゆる、「産業民主主義」のみならず、「労働組合の自治」(die Autonomie der Gewerkschaften)をも制限する可能性をみとめているが、国家権力の保持ではなく、その死滅、社会的自治組織への転換を目的とするプロレタリア国家の理念によってこの「制限」もまた制約されていることを主張する(18)五四以下)。

国家が「意識性」を原理とし、レーテが経済システムとして土台に位置づけられていることに注意しよう。国家というかたちで結実された結合生産者の意識性は、それ自体で普遍的なものとなるのではなく、レーテという結合生産者の物質的あり方との相互関係のなかで普遍性の一環たりうるのである。ここでは、過渡期における理念の現実化を、意識性の側から基礎づけようとする方法はしりぞけられている。

レーテとプロレタリア国家との相互補完的關係を主張する以上、共産主義理念の現実化形態をレーテに一元化することもまたしりぞけられなければならない。意識性(上部構造)と物質性(土台)とのこうした「分裂」が生じるのは、そもそも物質的諸関係のあり方に根拠があるのだから、過渡期の経済諸関係のあり方が問われる必

要がある。コルシユはその社会化論で、「社会主義共同経済」における「社会的生産関係の調整、所有秩序」の問題、すなわち「いかなる人が現在ある生産手段を、生産に用いることを許され、また用いるべきか、いかなる労働条件の下で、生産が行なわれるべきか、そしていかなる方法で生産の成果を、生産者と消費者全体に分配すべきか」(20)三三八)という問題が存在することを指摘する。この課題は、「資本主義的な個別所有」を国有化ないしサンディカリズム的社会化にとってかえるだけでは解決できず、「この二つの処置の他に、たえず所有概念を内的に変化させること、つまりかの個別所有を全体の共通の利益の観点の下に、完全に従属させることが必要」(20)五〇)となる。社会化の形態は単一ではなく、プロセスとしては、「産業自治」(die industrielle Autonomie)という特別的社会化形態から「教育の社会化」への移行が展望され(同、六一)構造としては、「上からの管理」と「下からの管理」との同時的な遂行が展望される(同、七九以下)。この管理の二重の形態が意味するところはプロレタリア国家とレーテの関係としてすでにみたところである。³³⁾前者の、社会化プロセスについては「産業自

治」が「社会化された」グループの利己主義(同、六一)であり、「経済的私利の動機を生産参加者の非常に広汎な部分に拡大せしめる」(同、六〇)という把握に注意しておきたい。ここから「教育の社会化」(肉体労働と精神労働との分業の廃棄)への移行をコルシユは段階的にのべているが、社会化のこの二形態もまた、やはり相補的に機能するとみるべきであろう。

社会化のこの把握から明らかなように、コルシユは、一方では、拡大された「私利私害」(すなわち、ゲマインシャフト的諸集団の私的なあり方もふくめた)の領域の存立をみとめ、他方では、これにたいして相対的には自律的な共同性、普遍性の領域の存立をみとめており、両者の相互関係をつうじて共産主義理念への接近という過渡期社会のトータルな性格が形成されるものと考えている。ゲマインシャフト的關係の回復や、社会的生産システムの資本主義的無政府性から結合生産者の意識性、計画性への転換等々の理念が、コルシユのいうような現実化の過程をたどる、とみるのは一見したところ奇異な事からのように思われるかもしれない。なぜなら、ここでの結合生産者の共同性や意識性は依然として抽象的

あり、「私利私害」(拡大されたとはいえ)の媒介による現実化の形態をとらざるをえないからである。これは社会関係のブルジョアの分裂構造を過渡期に移しかえにすぎず、「本来の社会主義的關係」とはみなせない、とする見解もありえよう。しかし、マルクスの検討にさいしてすでにみたように、社会諸関係のブルジョアの分裂の根柢は、それら諸関係の結合形態の二重性にあるのではなく、その形態によって支配關係という内容が⁽³⁴⁾つらぬかれる、という点にあるのだった。したがって問題は、過渡期社会における諸關係の結合形態を一元化して示すことにあるのではなく、共産主義理念の現実化が動的原理たりうるような形態を見出すこと、すなわち、過渡期社会の矛盾が運動しうる形態を見出すことにある。この点でコルシユの社会化論が、普遍性と個別性との過渡期に固有の「分裂」という形態をつうじて共産主義理念の現実性、此岸性を獲得しようとしていることは、マルクスの把握と適合しうるように思われる。⁽³⁵⁾

過渡期社会における社会諸關係の結合形態のこの把握が共産主義理念の實現を最終的に保証しはしない、という議論は意味をもたない。たしかに、過渡期の社会諸關

係の結合形態が一元化されえないために、關係相互の矛盾が、理念によって規定されたわくぐみをこえてゆく可能性を排除することはできない。しかし、理念の理念としての総体性をどのように完成させたとしてもそうした可能性をあらかじめ排除することは不可能であろう。コルシユはそうした仕方を、いわば実践の彼岸化とみている。「それ(根本的な非宗教性、能動的な無神論)は、宗教的な彼岸表象の克服によるだけでは、完全な此岸性にみちびかれはしない。何かある理論のないし実践的『理念』の、永遠の、したがってまた非現世的な妥当性を信じる限りは、まだやはり、『彼岸』のうちに『彼岸』が存在する。」⁽¹⁷⁾(二三) こうした「此岸の側なる宗教」としての理念のあり方をうち破るものがコルシユにとつては実践なのである。⁽³⁶⁾ 理念と現実とのこの關係を確保することをこえて理念の妥当性を吟味できないことは、過渡期の現実と共産主義理念との關係についてもいえることであろう。⁽³⁷⁾

五 小括

理念と現実との二元論にたいする批判から出発して、

共産主義理念の現実性を問うことによって、過渡期社会の一性格がみちびかれた。すなわち、過渡期における共同性のあり様は、それとしては、なおその社会に固有の抽象性、観念性をまぬがれないこと、他方、この共同性のあり方と相補的に「私的利益」の領域が存立していること。結合生産者の「結合」は一元化された形態をもたず、むしろ結合形態の多様性をつうじて、共同性の現実的存立が確保されること、したがって共産主義理念の現実化条件が形態を与えられること、がそれである。これらの点でコルシユの過渡期論はマルクスの理念把握の方法の積極的展開であった、といえよう。「自己疎外」の止揚は自己疎外と同じ道をたどる」(2)五三三」とすれば、過渡期における理念の存立形態の、ブルジョア社会におけるそれとの形式的連続性は、かえって前者による後者の止揚の可能性を示すものといえるのではなからうか。

過渡期にたいする理念論的アプローチがふくみうる問題はさらに以下のように考えられる。

過渡期社会を共産主義理念の現実化の観点から連続的につかむことによって過渡期社会の「有機性」を主張し

うる。その場合に狭義の過渡期に固有の問題の内容規定と、したがって広狭二義の過渡期相互間の関係理解とが新たに問題とされる。また、これとかわって、社会諸関係のブルジョア的結合形態における分裂・転倒構造の止揚の形態を規定するという問題が生じる。

共産主義理念をどのようにして過渡期の動的原理に内在に関係づけるか、という問題設定が、その理念自身の歴史性の把握を要求する。理念の歴史的諸形態の分析というマルクスの方法をその共産主義理念にかんしてもちいる必要がある。

これらの点についても、本稿で検討した、マルクス、コルシユに共通する理念把握の方法が有効であると思われるが、その検討は他日を期したい。

(1) 以下の引用文中での、傍点はその著作者による強調、傍線は本稿の筆者による強調を示す。

(2) ここでマルクスは「共産主義」「社会主義」という用語を後の理解とは逆の意味で使用しているが、両者の区分によってそれぞれの段階規定を明らかにするといふよりもむしろここでの問題は理念の現実的あり方の解明にあつたといえる。

(3) ここでは、これらの要素の個々の評価とそれらの要素

相互の関係についての検討にはたちいらぬ。理念の構成要素の死んだものと生きているものの区分(たとえばホルヴァート^[11](二〇以下)の前に理念把握の方法が問われなければならぬ。

(4) 理念批判の現実批判への移行をつうじての実践の導出については、フォイルパツハ・テーゼ、四および八を参照。共産主義理念のあり方もこの理念把握の方法をふまえている。初期マルクスにおける共産主義理念の形成については平子友長論文^[29]を参照。

(5) 「私的所有の、いいかえればまさに経済の運動のうち、全革命運動はその経験的な土台も理論的な土台をも見出すということ、このことの必然性はんたんに見抜ける。」⁽²⁾(五三六)

(6) ただし段階といっても、諸段階は、私的所有という現実的基礎に制約された共産主義諸理念を内容としており、未来の社会状態の段階的把握ではない。

(7) 「否定の否定としての肯定」はここでは、いわゆる歴史の三段階把握を意味していない。むしろそれは、「現存するものの肯定的理解のうち、その否定的理解を含める」という社会把握の弁証法にかかわる。

(8) 『リスト評註』における、生産諸力の肯定的性格への着目は、物象化されたブルジョア的産力概念への批判(「私人間を『産力』(として)扱うなら、現実的主体を別の主体をかえ、現実的主体に別の人格にすりかえるこ

とになる。人間は富の原因として現存するにすぎなくなくなる。」^[3](九八)と結びついて獲得された。ただし両者の関係がそこではまだ十分に媒介されてはいない。

(9) 「生産諸力が諸個人からまったく独立した、きり離れたもの、諸個人とならぶひとつの独自の世界として現われる。このことの根柢は、諸個人(彼らの力が生産諸力なのだが)が分裂し、互いに対立しあっていること、しかし他方で、これらの生産諸力は、これら諸個人の交通と相互連関によらなければ現実の諸力にならないということである。」⁽²²⁾(一五七)

(10) ^[22]七〇等。生産諸力との関係で交通形態(die Verkehrstorn)の理解が問題となるが、ここでは省略する。

(11) これはマルクスのカテゴリー把握一般にいえることである。たとえば^[8]四八六―七参照。

(12) ^[23]二八八以下。エンゲルスは、大工業的結合形態とそれに照応する生産者の主体形成を将来社会の社会関係の基礎にすえていた点では初期から首尾一貫している。⁽²⁴⁾(三九三)。

(13) 大工業のこうした性格づけは、非現実的な産力規定を共産主義理念の現実化条件として設定することを意味する。(拙稿^[30]四七以下参照)。マルクスにあっては、「自然的なもの」(das Natürliche)は特定の社会形態に媒介された形態をもつ(コルシュ^[21](二〇二)から、それはたんに以前の段階の社会形態の遺物とはみなせない。この

点で過渡期における「相対的無政府」についてのプーリンの指摘〔25〕〔五九〕は示唆的である。

(14) プーリンが計画を「土台」に含めるときの方法はこうしたものであるように思われる〔26〕〔三九八〕。そうした方法が「生産力主義」として批判された(バンメル〔14〕〔三八以下〕)のは、本文でみた欠陥をつかれたものと思われる。グラムシによるプーリン批判〔27〕は「生産力主義」と主意主義の相補性自体を批判している点でより根本的である。

(15) 大工業と個人の全面発達を直接に結びつけてこの難点を克服する試みが成功しているとはいえない。『経済学批判要綱』にもその試みがあるが成功していない〔6〕〔五九三等〕。それらの個々の検討はここでは割愛する。

(16) 「本来の移行期には社会はいかなる生産組織によっても支配されていない」(ルカーチ、〔10〕〔三八四〕) そうした時期には、ソビエト組織が「経済の社会主義的な、したがって意識的な土台をすえる」機能を果たす(同、〔四三三〕)。これは一例であって、こうした把握はルカーチにかぎらず、一〇月革命当時のいわゆる正統マルクス主義者内でも一般的だったと思われる。

(17) 〔13〕五五以下参照。

(18) 〔7〕三三参照。

(19) 〔6〕九〇七等を参照。

(20) 疎外と物象化とは、ブルジョア的生産の転倒構造をあらわす論理としては同一である。〔6〕二〇二、三八七を比較参照。

(21) 関係の物象化は、関係の人格化をみちびく。人格化は意思機能の対象的あり方を生みだす。この視点から人格化概念を検討することが必要であろう。マルクスの用法については〔8〕二九〇、〔4〕二二二、〔6〕二二一、三五六等を参照。

(22) 〔7〕一六以下参照。

(23) この点で、物象化の進展が意識の徹底的外在化をもたらず、というルカーチの把握(『歴史と階級意識』における)は疑問である。「商品関係の、『幻影的对象性』をもつた物への転化は、人間の意識全体に幻影的对象性の構造をおしつける。人間の諸性質や諸能力はもはや人格の有機的統一とは結びつかなくなり、人間は、外界のさまざまな対象と同じく、『所有し』、『譲渡する』ような『物』として現われる。」〔10〕〔一九四〕意識の対象的關係への包摂は、对象的意識の形成でもあるはずである。この意味での意識の現実的意識としてのあり方の検討が問題なのであり、物象化の克服にあたってこの点が無視されてはならない。さもないと、意識の純粋なタリテートに依拠する、現実の克服がめざされることになる。

(24) 本来ここではヘーゲルの市民社会論との関連でこの問題を論じるべきであるが、その余裕がない。こうした普遍性のあり方については後藤道夫論文〔28〕参照。

(25) 階級の身分とのちがいをマルクスはこうした媒介形態

- の有無にみている。「身分の場合には個人の享受や素材転換は、彼がそこに包摂されている特定の分業に依存している。階級の場合には、彼が自分のもののできる一般的交換手段に依存しているだけである。」(5)五〇九)
- (26) したがって関係の透明性 (die Durchsichtigkeit) は関係の一元化を意味しない。
- (27) 「粗野な共産主義」についてのマルクスの記述を想起されたい (2)五三五—六)。
- (28) ブルジョアの二元論批判はコルシユの唯物論理解の核心をなすものであり別に検討を要すが、ここではなしあたり、[19]三七以下、[17]二〇以下を参照。
- (29) [7]二三。
- (30) 理論のイデオロギー性と科学性といいかえてもよい。
- (31) 「産業民主主義」と「組合自治」とではヘルのちがいがあ (18)四五以下)。
- (32) この点は、ブルジョア国家をその経済関係から展開する「唯物論的方法」と関係するがここではその点にふれる余裕がない (19)六六—六九)。コルシユの方法はフランクフルト学派のいわゆる国家導出 (Staatsableitung) 論に接近していると思われるが、それにうけてもあれえなう。
- (33) 二重の形態の全体をさしてレーテ体制とらう場合もあるが内容上は形態は一元化されていぬ。なお、ネットワークはコルシユのごうした構想を積極的に評価したうえで、それを認識論における「構成問題」(die Konstitutionsfrage)

のひとつの解決のころみとみなしている (16)一〇八—九)。ネットワークのこの評価は興味深い。

(34) いわゆる「領有法則の転回」論がこの論理を展開している。そこで支配関係の諸側面の「統一」の構造と、その「統一」の解体がもたらす意味について種々の議論があるがここでは立ち入らない。

(35) 当時の社会化論の中でコルシユの社会化論を評価することは筆者の能力にあまる。さしあたり [15]一四四参照。

(36) コルシユの実践概念についての評価はここでは留保しておく。

(37) 理念の総体性にもとづいてその過渡的な現実化形態を導出する試みが理念と現実との分裂を克服することはできない。この場合、理念の現実化が、「上から下へ」という方向で規定されることになる。ルシユは、自主管理における「参加」の形式化現象とかわらせてこの問題にふれている (12)。

〈参考文献〉

- [1] Karl Marx, Brief aus den, Deutschen-Französischen Jahrbüchern, MEW. Bd. 1
- [2] Karl Marx, Ökonomische-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, MEW, Ergänzungs Bd.
- [3] Karl Marx, Über Friedrich Lists Buch: "Das nationale System der politischen Ökonomie", EDI

- [4] Karl Marx, Friedrich Engels, Die deutsche Ideologie, MEW, Bd. 3
- [5] Karl Marx, Reflexion, 1851, MEGA, I-Bd. 10
- [6] Karl Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz, 1974
- [7] Karl Marx, Manuskript 1861-63, MEGA, II-Bd. 3. 1
- [8] Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, MEW, Bd. 26-3
- [9] Karl Marx, Das Kapital, Bd. 1, MEW, Bd. 24
- [10] Georg Lucács, Geschichte und Klassenbewußtsein, 1923, Luchterhand 1970.
- [11] Branko Horvat, Die jugoslawische Gesellschaft, Suhrkamp, 1972
- [12] Veljko Rus, Problems of Participatory Democracy, in: Selfgoverning Socialism: vol. 2, 1975
- [13] Max Werner, Der Sowjetmarxismus, in: Gesellschaft: Bd. IV-7
- [14] Вакмелъ, К постановке проблем исторического материализма в реконструктивный период, Под знаменем марксизма, 1929, No. 10-11
- [15] Klaus Novy, Strategien der Sozialisierung, Campus Verlag, 1978
- [16] Oskar Negt, Theorie, Empirie, und Klassenkampf, Jahrbuch Arbeiterbewegung 1, 1973
- [17] Karl Korsch, Kernpunkte der materialistischen Geschichtsauffassung, Leipzig, 1922
- [18] Karl Korsch, Arbeitsrecht für Betriebsräte, 1922, Europäische, 1968
- [19] Karl Korsch, Die Materialistische Geschichtsauffassung, Leipzig, 1929
- [20] ロルンツ『レーナ運動と過渡期社会』木村靖二・山本秀行訳
- [21] ロルンツ『カール・マルクス』野村修訳
- [22] マルクス『ドイツ・イデオロギー』花崎泉平訳(ただし訳語を変えたところがある)合同新書
- [23] エンゲルス『反デューリング論』大月版全集第二〇巻
- [24] エンゲルス『共産主義の原理』同第四巻
- [25] ブハーリン『経済学者の手記』和田敏雄, 辻義昌訳, 現代思潮社
- [26] プレオブラジンスキー『新しい経済』救仁郷繁訳, 現代思潮社
- [27] グラムシ「一般的諸問題」, 選集第二巻, 合同出版
- [28] 後藤道夫『「普遍性」についての一考察』『講座日本の学力』第五巻, 日本標準
- [29] 平子友長「マルクスに於ける共産主義理念の形成とその科学的基礎」『哲学の探究』一九七六年版
- [30] 拙稿「マルクスの社会主義像と結合生産様式論」東京唯

(37) 過渡期社会における共産主義理念

研『唯物論』五一号
(なお、本文および注の文献番号に続く数字はページを示す。)

(一橋大学大学院博士課程)